

報 告

タイ国のセント・ルイス・カレッジ (Saint Louis College) における国際看護論の学習成果と課題

Learning outcomes and tasks of International Nursing Course
at Saint Louis College in Thailand

尾崎 フサ子 八尋 道子 竹尾 恵子

Fusako Ozaki, Michiko Yahiro, Keiko Takeo

キーワード：国際看護論，学習成果，学習課題，看護学生

Key words : International Nursing Course, learning outcomes, learning tasks,
nursing students

要旨

本学国際看護論 (an elective) (2単位、30時間) では、タイ国セント・ルイス・カレッジ (Saint Louis College : 以下、SLCと記す) において国際看護論の講義、施設見学を学生5人が受けた。タイ国の文化、歴史、陸続きの他国との関係等を目で見ても肌で感じることができた。学生たちは他国が抱える健康問題や看護のあり方、人々の生活様式を訪問を通して理解し、それぞれが視野を広げ、異文化理解や看護観を深めた。これらは実際にその場で考え感じとった理解、経験からの学習成果であった。さらに、今回の学習中 SLC の学生が本学の学生のバディ (buddy 仲間) となって、学生の立場から SLC の授業や臨地実習内容、タイ国の実情を個々に英語で話してくれた。さらに学生達は同年代・同学年であることから将来を見据えた話もできていた。SLC の学生らはタイ国をはじめて訪問した日本の学生たちをサポートしてくれた。これらは双方に大きな成果をもたらしていると考えられる。

今後の課題としては、①国際看護論への事前準備の時間を細かく計画する必要がある、②タイ国における講義終了後は30分から1時間の復習が求められた、さらに③来年度は今年度の学生が望んだ SLC の授業に参加できるように交渉する。また、④国際看護論を通して SLC と佐久大学学生間の共同研究に取り組む、などがあげられる。

I. はじめに

医療の分野では国際化の急激な発展に伴い、国際看護に関連する分野をカリキュラムに取り入れる学校が多くなった。さらに、外国での看護研究の発表も米国、カナダ、英国等をはじめ、近年ではタイ国、韓国および台湾等アジア圏内の様々な場所でも行われるように

なった。国際間の相互理解が看護を通して盛んに行われるようになってきた。

本学では、多様な状況下、多様な価値観や習慣、伝統のあるところで、看護援助をどのように効果的に進めるべきかを考察し、国際的な視野で看護活動のあり方を学習できることを目指した。これは地球上の人々の健康問題に対する看護の貢献への視野を広げること

表 1 International Nursing Practicum Schedule 2011

Date (week)/time	Descriptions
9.11 (Sun.) 4:00	Five students and one leader bused from Sakudaira to Narita airport. Another leader joined them at Narita. All 7 members flew direct to Bangkok in Thailand
9.12 (Mon.) 9:00 13:00	Orientation about Saint Louis College International Nursing Course Saint Louis College Tour Lecture on Health Care System of Thailand by Professor Boonyanurak
9.13 (Tues.) 9:00 13.00-16:00	Lecture on Nursing Profession (Education and Services) in Thailand Lecture on Nursing in Asia and the World: Facts, Issues and Trends
9.14 (Wed.) 1 2	9:00 Visit Samutsakorn Community Hospital 13:00-16:00 Visit Kratumban Community Hospital Group Discussion on the Primary Health Care Services in Thailand
9.15 (Thur.) 3	9:00 Visit Wat-tad-thong Public Health Center 21 13:00-16:00 Group Discussion on Community Nursing Service in Thailand
9.16 (Fri.) 4 5	9:00 Visit Bangkhae Home for the Aged 12:30-16:00 Visit HDF Mercy Center—Aids Home
9.17 (Sat.) 6	9:00 Visit Saint Louis Hospital Group Discussion on Hospital Nursing Service in Thailand
9.18 (Sun.) 7	Grand Palace
9.19 (Mon.) 7 8	9:00 Students' Group Discussion/Presentation 13:00 Evaluation 17:30 Friendship Party
9.20 (Tues.) 4:35 7:35	Departure from SLC to Suvarnabhumi Airport Flight to Japan

(表中の□内の番号は、学生が訪問した施設の写真の番号を示す)

につながると考える。国際看護論（選択、2単位、30時間）は、4年次生を対象に平成23年度に開講した。5人の学生が履修登録し、タイ国のSLCで講義および6施設の見学を行った。施設の1つ老健施設では、入所中の人々との温かな交流もできた。また、バディとなってマンツーマンで対応してくれたSLCの学生とは、日常生活をはじめ、考え方、お互いの国の問題点までさまざまところに触れることができた。

日程は9月11日から20日までの10日間タイ国（バンコク）に滞在し、前掲のスケジュールで国際看護論を学習した（表1）。

9月12日の午後と13日は Dr. Boonyanurak による英語の講義がミーテングルームで行われた。9月14日から17日までは5人の学生は本学のユニホームを着用して保健省管轄の一般病院、老健施設、エイズ・ホーム、および近代的なセント・ルイス・ホスピタルを訪問した。

Ⅱ. セント・ルイス・カレッジ看護学部での講義（研修第1日・第2日）

1. タイ国のヘルスケアシステム

Health Care System of Thailand

本学学生が最も関心を持った点は、隣国と陸続きであることから、他国の人々（低所得者）の流入があり、その侵入者に対しても拒むことなく医療が提供されていることである。

2. タイ国における看護職の教育とサービス Nursing Profession : Education and Services in Thailand

看護教育は4年制の大学教育であり、看護師は日本でいう保健師の仕事も行う。

国家試験は年3回実施されている。

3. アジアおよび世界の看護の実際と問題、最近の傾向

Nursing in Asia and the World: Facts, Issues and Trends

最も力がこもった講義はASEAN（東南アジア諸国連合）*の動きであった。ASEANには日本、中国、韓国そして台湾は参入していない。このASEANの連合には看護の動きもあり、各国で看護師の力を向上させようと協力し合っている。その教育の中心となるところがタイ国であった。平成24年1月には24人ほどの看護師がカンボジアからSLCへやってきて1年半ほどの教育を受けて大卒資格を得て帰国するという。Dr. Boorqanurakの講義の中ではカンボジア、ラオスの看護師支援に力が入っていた。

我々は研修期間中にも5人のカンボジア看護師に出会い挨拶をかわしているが、アジア全体の看護力向上にタイ国が大きな役割を果たしている印象を受けた。

* ASEAN加盟国：インドネシア・マレーシア・フィリピン・シンガポール・タイ・ブルネイ・ベトナム・ラオス・ミャンマー・カンボジア

Ⅲ. 学生が訪問した施設

第3日：9.14（水）午前

①サムサコーン・コミュニティ・ホスピタル Samutsakorn Community Hospital



①サムサコーン・コミュニティ・ホスピタル

保健省管轄の一般病院である。1958年に建てられた。病院は24時間開いている。診療科：歯科、薬物中毒、眼科、耳鼻科、咽

頭、婦人科、家族、小児科、肘関節手術、一般外科・内科、神経外科、針療法、形成外科、閉経期の婦人、結核、心臓、血圧、ストレス緩和、化学療法（土曜日）心理療法（日曜日）

内科のヘルス・チェック：年代別による3つのプログラム有

写真①の前列右から2人目の男性は中国人で、現地のタイ語はもちろん、日本語も、近隣の国からタイ国に密入国で入ってきた人々の言語に対しても病院のボランティアの通訳者として活躍している。我々が訪問した際には日本語の通訳を引き受けていた。

第3日：9.14（水）午後

②クラツバン・コミュニティ・ホスピタル Kratumban Community Hospital



②クラツバン・コミュニティ・ホスピタル訪問時メコン川を背景にしたスナップ写真

1977年9月設立の地域拠点病院は2人の医師、3人（11）の看護師、4人（100）の職員で始まった（カッコ内は現在数）。新たな職種として歯科医師6人、看護助手21人が加わりほとんどの診療科目が開設されていた。ゴールは質の高いサービスの提供である。

1日おおよそ700人の患者が受診する。病棟を見学して驚いたことが複数あった。

第一に、男性患者病棟・女性患者病棟というように、病棟が性別で分けられていた。第二に、病室は部屋でわかれているのではなく、広いフロアに20以上のベットがあった。カ

ーテンはなく、必要時だけスクリーンを運ぶという。場合によっては廊下が病室に変わるときもありであった。患者の受診は断ることなく受け入れていた。

病院のすぐ前には川幅の広いメコン川がゆったりと流れていた。案内役の医師は雨期時の増水を心配していた。

第4日：9.15（木）午前

③ワット-タド-ソン・パブリック・ヘルスセンター

Wat-tad-thong Public Health Center



③パブリックヘルスセンター所轄地区を担当ナースと訪問

このセンターは地域に密着していた。センターから離れると写真のような極めて低所得者層の住居があった。ここには訪問看護師が気持ちよく患者と話したり、そこで働いているボランティアに住民の様子を聞いたり、仕事を指導していた。

指導を受けている住民の住んでいるところは訪問した学生の誰もが初めて目にするような場所だった。目の前の川はほとんど流れていないにも関わらず汚物が捨てられて、匂いもあった。

この地区の訪問時に住民から学生達が立っているのをみて、椅子が出された。誰も遠慮して座らなかった。後日、この時の様子を思い出して学生が、「椅子」に座らなかったことに（住民は）気分を悪くしたのではないかと、好意を受けて座るべきでなかっただろうかと心配していた。

第5日：9.16日（金）午前

④高齢者施設：バンカエ・ホーム
Bangkhae Home for the Aged



④バンカエ・ホーム：高齢者施設で入居者のゲームを見る本校の学生（ネームカードをさげている）

1996年に設立された高齢者ケアサービスのための最初の施設。広い敷地にゆったり建てられている印象をもった。ここで学生はパディと一緒に入居者とゲームして、笑いあった。

最後に日本の学生は「ふるさと」を合唱して、次の目的地へ向かった。

注. 入居者が作成した作品、「かご」や花の入った小さな竹細工の小物、レースあみ等が施設内の売店で販売されていた。

第5日：9.16（金）午後

⑤マーシー・センター：エイズ ホーム
HDF Mercy Center—Aids Home
Human Development Foundation (HDF)

HDFマーシー・センターにはエイズ患者が家族で入居している。

エイズ患者である子供の作品が貼ってあった。明るい気持ちで描いている絵であった。このセンターは全職員がエイズ患者である。つまり働くことでエイズ患者の生活を安定させたい意図があった。学生も教員もエイズ患者が病院のスタッフと知って驚いたが、日本はエイズを特別視しすぎるのかもしれないと後日、我々は話し合った。

ここでは入院中のエイズ患者も見舞った。
写真右から2人目の大きな男性は神父でセ



⑤マーシー・センター：エイズ ホーム

センターの所長である。学生にセンターとエイズについて説明をしている。

第6日：9.17（土）午前

⑥セント・ルイス・ホスピタル
Saint Louis Hospital



⑥セント・ルイス・ホスピタル (Saint Louis Hospital)

病院は1892年9月設立。入院患者数500人、2000人以上の外来患者が訪れる。

訪問した地域拠点病院とは大きく異なり、この病院は我々が思い描く「病院」で、設備も整い、ナースも他の医療スタッフも笑顔で我々を迎えてくれた。

見学中に病院長（写真 右側の男性）にお会いできた。院長は日本をたびたび訪問されている。親日家のように我々をあたたくお出迎えて下さり、院長の日本での出来事を話された。

第7日：9.18 (日)

7 Grand Palace

ワット・プラケオ&王宮の観光



7 入り口を守る鬼人像の前で

はじめての日曜日はGrand Palaceでの観光を楽しんだ。タイ王国の歴史に触れた1日で、もっと深く知りたいと思った。

王宮正門から入場するにはノースリーブや短パンのような肌を露出する服装は着替えが求められる。前もってその情報をもらっていたので特に問題なく全員入ることができた。

タイ国民と王室の強いきずなと伝統を感じた。人を尊ぶ心の原点に触れたような気がした。

第8日：9.19 (月)

8 Students' Group Discussion/Presentation

バディ達と参加学生のグループディスカッションが行われた。プレゼンテーションがまだであった2人の本学学生がここで発表した。バディはここでマッサージを実演しながらプレゼンテーションし、日本の参加者とお互いに意見交換を行った。

全日程を通した日本の学生のプレゼンテーションタイトルは以下の通りである。



8-① SLC と佐久大学学生のグループ・ディスカッション



8-② 両方の学生が集まり、グループディスカッションの進め方を引率教員を囲んで検討

- 1) Nursing education in Japan
- 2) Hospital system in Japan
- 3) Hospital in Japan
- 4) Community nursing service in Japan
- 5) Health service facility for the elderly

日本の学生の内容はDr.Boonqanurakの講義内容に沿っていた。日本の学生がより比較し、理解しやすいようにという配慮があった。

第9日：9.19 (月) 夕方

9 Friendship Party フレンドシップ・パーティ



9フレンドシップパーティ 記念撮影

本校の5人の学生は日本から持ってきた自分のゆかたを着てパーティに参加した。SLCの学生達も民族衣装であった。

会場ではタイ伝統のダンスが披露され、交流が図られた。

ここでは、Dr. Anusantiの希望で「ぞうさん」を歌った。参加者全員が歌えるようにスライドに「ぞうさん」の絵と歌詞を書いて写し出した。

IV. 学生が示したタイ国と日本の類似点と相違点

講義と複数の施設を訪問した後、5人の学生は教育、看護体制、ヒューマニズム等日本とタイ国の類似点と相違点として挙げた。以下はその内容の一部である。

1. 類似点：病院システム

- 学生A 医師が求める就職先や患者が受診する病院は大病院思考になっている。そのため、都市部にある大きな病院に人が集まりやすくなる。その結果、患者さんの待ち時間は長くなると考えられる。大きな病院にいけば、高度な医療が学べることができ、医療を受けることが可能という考えから大病院に人が集まると考えた。
- 学生B 看護や患者・家族に寄り添い、患者や家族の意志を尊重して行う看護は日本と類似している。
- 学生E 国の文化が違って、患者や住民への対応や看護への考え方や方法に大きな違いはないと思った。

2. 相違点：

- 学生C タイの病院は日本と違い病棟全体が一つの大きな部屋になっており、患者が同じ空間で入院していた。これは医療者から言えば、緊急時にすぐ（異常が）発見できるという利点があると感じた。しかし、気になるところは、感染の心配と患者のプライ

バシーが保ちにくい点が気がりである。

- 学生D 看護学生の実習サイクルの違いであるが、日本では実習期間は講義がなく、まとめて一気にやるのに対して、タイでは週2日実習、3日講義というのが年間通してあるので、授業と実習がリンクしていて理にかなった方法だと思った。

- 学生E 文化の違いなどからか疾患の種類の違い、病院施設の違いが表われていたと思った。

V. セント・ルイス・カレッジにおける国際看護論の学習成果と課題

1. セント・ルイス・カレッジでの履修の成果

1) 履修生の研修レポートから

学生が研修後に提出したレポートから、彼らがタイを訪れる以前に持っていた自分の考えを国際看護論を通してどのように発展させていたかを読み取ることができた。学生たちは「日本であたりまえと思っていたことが、あたりまえでなかった」、「タイの病院・施設見学や、ディスカッション、学生同士の異文化交流などを通じて、日本にいただけではわからなかったことを多く学ぶことができた」、「実際に目で見て肌で感じることは、どんな学び方よりも、学びが大きかったように感じる」と述べていた。学生の一人は、以下のよう

「タイでは、代替療法が治療の一環として確立し、たとえば訪問した公立病院もマッサージが受けられる本格的な部門を持ち、外来患者も入院患者もともに利用できるシステムになっていた。日本でも、疼痛緩和の目的などで、マッサージやアロマセラピーを看護師が患者に提供することがあり研究もされている。しかし、タイのように専用の施設が病院

内にあるわけではない。成人看護学概論では、代替医療は科学的に解明できないため客観的効果を結果として表すことが困難であると述べられている。科学的な根拠がなくても、患者にとってプラスになるのなら充実させていく必要がある。」

この学生は、病院訪問をきっかけに、パディと一緒に日本とタイの代替療法を比較し話し合いの時間をもっていた。

他には学生たちは次のような異文化体験からの学びを得ていた。

- ・タイでは地理や気候と看護を結びつけていた。
- ・タイは政治、経済、国際情勢と看護を結びつけていた。
- ・相対的に日本の物質の豊かさに眼を向けていた。
- ・タイの地域医療で活躍するボランティアへの権限委譲に気づいていた。
- ・プライバシーへの配慮や清潔の観念にタイと日本との違いをみつけて、異文化の点で捉えなおしていた。

2) 最終学年 (4年次生) に国際看護論をとりいれていることへの評価

国際看護論のプログラムが学部の4年次に設定されていることは、妥当ではないかと考えられる。研修レポートには、タイ国の様々な施設を訪問したときの学生のレディネスがそろっていたことがうかがわれる。その理由として以下のような点があげられる：

- ・プログラムの実施が領域別実習や総合実習が一通り終了した時期であること。したがって、履修生には、病院や地域/在宅など看護が提供される場の日本国内での身近な体験があった。
- ・同様の理由から、看護実践に慣れていた。
- ・4年次の看護管理学の講義や就職活動によって看護システムについて考え始めたり、

興味を抱き始めた時期であった。

- ・最終学年は、医療全般の問題について多様な視点からアプローチできる応用力を蓄えている。

履修生の一人は、「次回外国を訪れるチャンスがあったら、その国の歴史や文化を最低限は勉強していこうと考えた。・・・1週間、タイでの生活や食事、パディとの出会ではいろいろなことを学習した。自分の無知さを知ることにもなり、とてもいい機会になった」とレポートを締めくくっていた。

3) S L Cの学生との交流関係から学ぶ

履修生はとくに印象に残ったこととして、S L Cの学生との交流をあげている。「言葉や文化が違って、同じ看護師を目指し勉強しているため話も合い、仲良くなれた」「将来頑張ろうとお互いに約束した」「パディたちだけでなく、キャンパス内で会う学生たちが私たちに声をかけてくれた。私たちを受け入れてくれている、歓迎してくれていると感じた」と書いていた。研修の最後にS L Cから授業評価のアンケートを受けたとき、履修生たちは、実際に実習に参加したり、授業と一緒に受けることができればもっとよかったと感想を述べていた。

4) 今後の課題

タイ国での国際看護学学習における今後の課題としては、次のような点が考えられる。

- (1)国際看護論の授業参加が決定した時点から事前準備の時間を十分とる必要がある。
- (2)セント・ルイス・カレッジでの講義終了後は、30分から1時間程度の復習が有効と考えられる。
- (3)来年度は今年度の学生が希望するセント・ルイス・カレッジの授業参加ができるように交渉していく。
- (4)国際看護論についてセント・ルイス・カレッジと佐久大学の共同研究を進める。その目的として、国際看護の発展のために、アジア圏に存在している看護の技と知識をど

のように育んでいくかを協力しながら探求することができるのではないだろうか。

VI. まとめ

国際看護論履修生の5人のうち1人は1年間の高校生時の外国経験はあったが、他の学生は外国の土地を歩くことは今までになかった。5人とも自身のことばで本学で学んだ看護を外国の看護と比較することは初めての経験であった。その土地での文化、医療、看護に触れることで、参加学生は「タイでの病院・施設の見学やディスカッション、学生間の交流を通じて、日本にいたるだけではわからないことが多く学べた」と書いている。「実際に目で見て肌で感じることは、どんな学び方よりも学びが大きかったように感じる」とも書いていた。

他の参加学生も同じような感想がレポートに記載されていた。

国際看護論を海外で行うことは、自国における看護とは異なるところに触れて生まれてくる学生の独自の芽を我々はサポートすることではないかと感じた。つまり、チーム医療に求められる他者と協働する力（今回はbuddyを通して培われたのではないか）、文化の違いがもたらす看護（日本の地域医療を終えたばかりの学生にとっては、看護師のボランティアを大切にして指導している様子を見た－保健師はタイ国にはない－）等様々なところから学生たちは異なる部分をキャッチしていた。学生のこの経験が何らかの形でそれぞれの力になっていくと考える。

学生たちが看護の共通部分もキャッチできていたことは、4年生の看護学生ならではの学習成果であると思った。

最後にSLCのスタッフとSLC学生(buddy)への謝意

国際看護論を進めるに当たって、SLCの職員や学生から多大なご協力を得たことをこころより感謝いたします。以下に主な教員名およびバディの名前を記載して、感謝の意を表します。

Saint Louis College Faculties:

1. Dr. Adela Phisutsinthop
2. Asst. Prof. Dr.Prabha Limprasutr
3. Dr. Somsri Sumet
4. Assoc. Prof. Dr.Prabha Limprasutr
5. Assoc. Prof. Dr. Puangrat Boonyanurak
6. Miss. Naiyana Janjirasakul
7. Dr. Laiad Jamjan
8. Asst. Prof. Dr Suwannna Anusanti
9. Asst. Prof. Dr.Maleewan Lertsakornsiri
10. Asst. Prof. Dr. Raywadeetas Robkob
11. Dr. Kaewtawan Sirilakananum
12. Ms Charito R.Cruz
13. Mrs. Urailuk Bourthannom

List of Saint Louis College fourth year students “buddies”

1. Ms Juntratip Wonginta
2. Ms Lalita Umphaphai
3. Ms Ninlaya Hiranto
4. Ms Nipanporn Sousuk
5. Ms Netphat Phraiwhok